

アフリカ文学と Oral Literature (8)

- 『ビードル』論 -

赤 岩 隆

要旨： 前回に引き続き、ポーリン・スミスを取り上げ、それによって書かれた唯一の長篇小説である『ビードル』について論じる。これは、タイトルの有り様からして、問題含みとみなし得る作品であり、そのことと、なにより短篇小説家だった作者との関係について考察する。その際、役に立つのは、前回の『リトル・カルー』をめぐる議論であり、それに拠りながら、この一風変わった長篇小説を読み解いてゆく。

1

『リトル・カルー』という密度の濃い短篇集を漸く43歳になって上梓できたポーリン・スミスだったが、それだけでは目標を達成したことにはならなかった。話は20世紀初めのことである。長篇小説をものしてこそ小説家であるという19世紀的な考え方は、なおも根強く残っていた。ましてや、師と仰ぐ小説家は、旧弊などまでは云わないにしても、なにより長篇小説を得意とするアーノルド・ベネットだった。師に就いて十数年、人並み外れて内向的だった彼女にすれば、長篇小説執筆をめぐる再三の失敗の果てに、想いはある種トラウマのような様相を呈していたとも考えられる。ポーリン・スミスの唯一の長篇小説『ビードル』(1926)は、そのようにして書かれた。自ずと生まれたというよりは、むしろ絞り出されるように作品化されたものだった。このことと、ポーリン・スミスという作家がもともと短篇小説のほうにこそむいていたのではないかという強い印象とは、あわせて念頭に置いておいてもよいだろう。じっさい、そうしたずれ、あるいは、苦闘を伴う力業は、この作品にきわめて特徴的な歪みをもたらすことにもなっている。本稿においては、ひとつには、そのようにして物語に現出した歪みとその由来について考えてみたいと思っている。

もうひとつの議論は、いうまでもなく、oral literatureの観点から行なわれる。前回の『リトル・カルー』をめぐる考察からも明らかなように、ポーリン・スミスという作家は、聞き取りを通じての、諸々の声やいわゆる orality といったものから、多く恩恵を被りながら仕事をした作家だった。創作の起点となった故郷南アフリカを巡る旅は、取材のためという、当初の、むしろありふれた目的を遠く超えて、自身のアイデンティティとも深く関わる失われた時の回復というラディカルな試みへと自ずと彼女を連れ出していった。『リトル・カルー』に収められた諸短篇とは、その末に得られた成果だったのだが、翌年に出版された『ビードル』も、当然のように、それと出自を同じくするはずである。にもかかわらず、取材の多くが短篇小説という形を取るなか、唯一『ビードル』のみが長篇小説として結実した。ここで浮上するのは、ようするに、『ビードル』もまた、もとは短篇小説として発想されたのではなかったかという疑いである。それが長篇小説へと発展した。文学的にはめずらしくもない現象だが、もしもそうだとしたら、このことと上述の歪みとは、あるいは、そもそもの oral literature 的な出自と

は、けっして無関係ではないだろう。なにゆえ『ビードル』一作のみが、例外的な道筋を辿ることになったのか。その理由について考えてみたいと思っている。

2

一般には読まれることの稀な作品である。まずはその概略について紹介しておくことにしよう。舞台となるのは、前作同様、リトル・カルーである。そのうちの、これまた前作所収の短篇小説とも重複する、ハーモニーの谷にある農場とその周辺が主要な舞台となる。おもな登場人物は、もちろん、ほぼ全員がアフリカーナである。農場主夫妻と、農場主が建てた教会の堂守、その堂守が同居するふたりの姉妹と若い姪、そして、病気の療養を兼ねて農業を習いにくるイギリス人等々である。このうち、主人公は若い姪である。それがイギリス人の手管にかかり、妊娠させられた末に棄てられる。話といえば、わずかその程度のものである。だが、これに重い過去の事件が絡んでくる。ふたりの姉妹には、もうひとり末の妹がいて、これが若い姪の、いまは亡き母親なのだが、それをめぐる過去の出来事である。この末の妹が農場の暮らしを嫌い、町に出て妊娠し、娘を産むと同時に死んでしまった。そうした不幸にはふたりの姉と堂守も関係しているが、暗い過去の一事件として、詳細の多くは伏せられたまま物語は進められてゆく。それでも、真ん中の妹と堂守がかつてよい仲だったこと、長姉と堂守の確執等々、おぼろげながら事件の有り様がみえてくる。そして、最後に到って、子どもを産む若い姪が、じつは自分の子であると堂守自ら告白し、物語は結末へとむかうことになる。

端折るだけ端折ってあらましを説明すれば、おおよそそのようになる。現在と過去の織りなす二重の物語というわけだが、より直接的に両者の接点となるのは、いうまでもなく、主人公＝若い姪のはずである。ところが、彼女は極端に控えめな性格であり、しかも、その度があまりにも過ぎており、結果、人物としてはむしろ平板にならざるを得なくなってしまっている。たしかに物語は彼女を軸に進行してゆく。だが、みようによっては、主人公という点からすれば、名ばかりと呼ぶのがせいぜいといったふうにもみえないこともない。先に触れた物語の歪みとは、いっぽうでは、これを指す。主人公の存在感のなさ、唯々諾々と流されてゆくだけでもみえる積極性の欠如である。本来なら、物語のタイトルは、主人公の名前を取って、「アンドリーナ」となるべきである。にもかかわらず、じっさいそうになっていないのは、なぜなのか。作者自身も主人公のひ弱さをことさら意識してのことなのか。あるいは、ほかになにか特別の理由があったることなのか。そもそも、なにゆえタイトルが「ビードル」でなければならないのか。

ビードルとは、もちろん、堂守を指す。だが、これもまた主人公とはなり得ない。ほかの人物同様、物語との関係からいえば、けっして脇役の域を出ない。にもかかわらず、タイトルにその名が挙げられているのは、ひとつには、現在と過去の二重の物語のうち過去のふんに堂守がもっとも強く関わっているからだろうが、といて、読者の目のまえで明らかに展開してゆくのは、アンドリーナを中心とする現在の物語にほかならない。そのなかでは、間違いなく堂守は脇役のひとりなのである。この矛盾＝歪みを、どのように理解すればよいのだろうか。いづれにしろ、どのような『ビードル』論も、この問題解決きにはあり得ないだろう。これが（二重の）物語の根本に関わる問題だからである。あるいは、そもそも、なにゆえ二重なのか。もっといえば、なにゆえ過去なのか。そうした疑問を足がかりにしつつ、作品を読み解いてゆくことにしよう。

3

繰り返しになるが、いかほど物語が現在と過去の二重にならざるを得ないとしても、あるいは、いかほど主人公がひ弱な存在だとしても、通常なら、物語のタイトルは「アンドリーナ」となるべきである。にもかかわらず、そうっていないのは、ひとつには、過去の出来事が作者にとってそれだけ重要だったからに違いない。この意味からいえば、たしかに堂守こそは、主人公とまでは云わないにしても、過去においてそれが果たした役割という点で、生存者中誰よりも重い存在である。じっさい、この作品は、現在の物語を表面にしなが、裏面を成す過去の物語の謎を読み解いてゆくといった、一種ミステリー仕立ての体裁を採っていると云えないこともない。もちろん、そこまで積極的に表の物語＝女主人公を蔑ろにするならば、それこそ作品それ自体が台なしになってしまうのだろうが、なにはともあれ、作者がことさら重きを置く過去の事件とはどのようなものだったのか、みとみることにしよう。

大枠は先に述べたとおりだが、与えられる情報はさして多くない。ハーモニーの農場で小作を務める謹厳な父親と3人の娘。母親は、末娘のクララがまだ小さいうちに死に、以後、謹厳さでは父親に負けない長姉のヨハンナが家を任せ一切を切り盛りすることになった。それに対して、歳の離れた妹のクララは、生来陽気さを好み、また、美人だった所為もあり、とかく反抗的な態度を取った。いっぽう、堂守はそのころはまだ、村と村を往き来しながら荷運びで生計を立てていた。これが温和しい二番めの姉ヤコバを好きになる。堂守はヤコバに求婚し、ヤコバもそれを受けるのだが、姉のヨハンナが結婚に強く反対する。クララと違って従順なヤコバを、自身の支配下から手放したくなかったというのが理由である。かくて、堂守とヨハンナの衝突がはじまるのだが、ここにクララが割り込んでくる。死んだ母親の遠いところが、離れた町でコーヒー・ハウスをやっている。ハーモニーでの田舎暮らしを棄てて、なんとでもそこで暮らしたい。現に、積極的な誘いの手紙も町から届いている。だが、そこにゆくには堂守の力がぜひとも必要である。クララは堂守とヤコバの結婚に味方し、それを梃子にして堂守に近づき、秘密の計画を打ち明ける。堂守は頼みを聞き入れ、クララを目的地まで連れてゆくことになるのだが、ここで妙なことが起きる。町に到着するまでのあいだに、堂守は、ヤコバからクララへと心変わりをしてしまうのである。そうだと気づいたのはヤコバだけだったが、控え目な彼女は、相手がクララなら致し方なしと容認してしまう。ところが、クララは堂守の想いにいっこうに応えようとせず、それどころか、評判の悪い男と結ばれてしまう。案の定、男に棄てられ、コーヒー・ハウスに戻ってきた彼女は、アンドリーナを出産するとともに死ぬ。報せを受けた父親とヨハンナが牛車を借り、町まで赤ん坊を引き取りにいった。堂守はそのときカラハリ砂漠にいて、運搬の仕事に戻っていたが、その際ハーモニーの農場主の息子を助け、功績を買われた彼は、3人娘の死んだ父親の後釜に坐る形で、農場の小作となる。と同時に新築された教会の堂守の仕事を任せ、ヨハンナ、ヤコバ、アンドリーナと奇妙な同居生活を始める。アンドリーナはそのときすでに4歳になっていた。

それから13年の月日が経過し、『ビードル』の物語がはじまるのはそこからなのだが、じつはアンドリーナの父親である堂守が、そうだとすることを他人に隠しながら女たちと奇妙な同居を続けるのは、ほかでもない、我が子の成長を近くから見守りたかったためである。もっと言えば、母親のように娘が罪に墮ちるのを防ぎたかった。だが、物語にあるとおり、母親同様美しく育った娘は、皮肉にもそれと同じ道を歩むことになるのだが、重要なのはここからであ

る。というも、ふたりの人生は、きわめてよく似ているとしても、まったく同じというわけではなかったからである。じっさい、母親は出産と同時に命を落とすが、娘は早産ながら無事お産を済ませ、我が子とともに生き残る。物語の最終行においては、自身の父親との和解すら達成する。これらは彼女の母親には、けっして望み得なかったことである。なにゆえ、そうした違いが生じるのか。考えなければならないのは、むしろこちらのほうである。

4

『ビードル』において、終始物語に付きまとうのは、宗教の問題、あるいは、それぞれの信仰の有り様にほかならない。この軛から脱しているのは、他所者であるイギリス人と、ハーモニーで雑貨屋を営むユダヤ人の女だけである。その理由は、単純に、彼らがアフリカーナではないからである。物語で扱われているのは、『リトル・カール』同様、いまだ近代化＝都市化される以前の古い社会である。病気になったところで、医者はもちろん、薬すらまともに手に入らない。買い物の支払いも、お金ではなく、物によって行なわれる前近代的な社会である。縫り付くことができるのは、唯一聖書のみといった、旧態依然とした社会である。それゆえにこそ、農場主は農場に教会を建て、近隣の貧しい者たちの便宜を図り、町から牧師を招いてサクラメントや感謝祭を主催する。じっさい、この物語は、春のサクラメントにはじまり冬の感謝祭で終わるというふうに、教会の儀式の暦に添いながら進行してゆく。前者においては、アンドリーナが大人の仲間入りをし、後者においては、堂守が秘密を告白するのだが、そうした社会においては、日々の細々とした出来事はもちろん、まさに一挙手一投足に到るまで、各々の信仰の有り様、唯一絶対の神との関係が問われることになる。そうしたやりとりは、いうまでもなく、個々人の内面において進行することになるから、その意味からいえば、『ビードル』を一篇の心理小説とみなしたところで少しも間違いではない。作中もっとも強く問われているのは、アンドリーナ及びふたりの伯母と堂守の内面（心理）＝信仰の有り様である。信仰という言葉が存在という言葉で置き換えてもいっこうに差し支えないような書き方である。人物と信仰の有り様とがそこまで一体化しているからである。また、それゆえにこそ、先に問題提起しておいたように、アンドリーナの主人公としてのひ弱さや不充分さが際立つことにもなる。ようするに、先に提起した問題の答えとは、彼女の信仰の有り様、唯一絶対の神との関係において求められるべきものだったのである。

アンドリーナの生き方は、なにより受動的なのを特徴とする。人に対しても、物事に対しても、一貫してそうである。およそ逆らうことをしない娘である。とりわけ人に対しては、役に立つことを旨とし、じっさい周囲からは大いに重宝がられ、手伝いに呼ばれば、嬉々としてそれに応じるのがつねである。ところが、その所為で彼女は身の破滅を招くことになる。というも、自分のことを体のよい遊び相手としかみない、口先だけのイギリス人に対しても、同じ対応、態度を取り続けるからである。処女を捧げるときも、身勝手な理由からいきなり帰国を決めたときも、そうである。控え目に、一步も二歩も引き下がり、よく云えば己を空しくして、ひたすら相手の意向を受け入れる。そうしたとき、彼女のふるまいの正しさの後ろ盾＝保障となっているのは、つねに神である。それへの篤い信仰である。自身の身に起こってくることは、どんなことでも、究極的には神の配慮による。だとしたら、どうしてそれを受け入れないでおられようか。どんな窮地からでも、きっと自分は救い出される。進むべき道を、きっと神

はお示し下さるだろう。

アンドリーナの信仰の有り様とは、そうしたものである。極端にすぎると誰しも呆れ返って当然だが、忘れてならないのは、これがけっしてリアリズムを裏切るものではないという事実である。極端だったのは、先に触れたように、現実のリトル・カルーの前近代性のほうである。それがアンドリーナにみられるような信仰の有り様を可能にした。とはいうものの、一篇の物語の主人公としてどうかとなると、自ずと話は別である。ある種の不謹慎さをアンドリーナの生き様に認めたとしても、ことさらきつく彼女に当たったことにはならないだろう。じっさい、『ビードル』は、ボストンでは出版禁止の処分を受けている。となると、疑わしいのは、むしろ作者の意図のほうである。ポーリン・スミスは、アンドリーナを主人公にすることで、いったいなにをしようとしたのだろうか。

5

生き様において変わらないのが身上とばかりに、頑固すぎるほどに頑固なアンドリーナだが、物語の終わりに到って、ひとつだけ大きな変貌を遂げる。しかも、その変貌が宗教に関わるとなれば、なおさら事は重大である。アンドリーナの信仰は、いかにもアフリカーナらしく、根っから旧約的な性質のものだが、これが新約的なものへと変わってゆく。鍵となるのは、ほかでもない、キリストである。それを理解することを通じて、アンドリーナは人間として生まれ変わってゆく。

彼女にとってキリストとは遠い存在のものだった。無理もない、キリストについては、誰も教えてくれなかったからである。それを彼女は、辛い経験を通じて、独力で学び取ってゆく。物語中において彼女が味わう苦難とはみんなそのためのものだった。ほんとうにそのように読んでよいなら、『ビードル』とは、アンドリーナの宗教的新生の物語とみなせないこともない。もっとも、それならそれで、なおさら物語のタイトルは「アンドリーナ」となるべきはずなのだが。

アンドリーナに理解できないのは、贖い主としてのキリストである。それに対する疑いは、牧師が町からやってきて、大人の仲間入りのための試問が行なわれる最初の sacrament の際に浮上する。彼女は自問する。「神の子は自分が神の子であることを知らなかったのか」。「自分が蘇り、父のもとにゆくことを知らなかったのか」。「もしもキリストが神の子でなくヨセフの息子だったなら、もしもキリストが蘇ったりせず、永遠に墓のなかに横たわり、そのために彼が死ぬのなら、理解もできるし、愛することもできるのだが」。最終的に報いを受ける犠牲とは、真に犠牲とは云えない。これが彼女の基本的な考え方である。それゆえ、イギリス人との関係においても、無理に結婚という報いを求めなかった。ひたすら与え続けてこそ、愛であり、犠牲である。そうした生き方に自分は殉じたいとして、イギリス人との別れに、その結婚相手に対して覚える嫉妬に彼女は耐え続ける。転機は容易に訪れなかったが、どん底に到って、ついに救いの手が伸べられる。

イギリス人が農場を去ると同時に、アンドリーナは、グレート・カルーに住む農場主夫妻の息子家族の手伝いに遣られる。そこで彼女は自分が身籠もっていることを知るのだが、当然のこと、その事実は息子夫妻の知るところともなる。お腹の子が不義の子であるのは、誰の目にも明らかだったから、辛く当たられ、居たたまれられなくなった彼女は、ハーモニーに戻りた

いと涙ながらに訴えるが、受け入れられず、苦し紛れも同然に、それまでは死んだと聞かされてきた行方知れずの父親を探しにゆこうと考える。運搬業で生計を立てる老人が、彼女の名字を耳にして、彼女の父親と思しき男の噂を聞いたと口にする。どこにも居場所を喪くし窮地に陥ったアンドリーナにすれば、藁にも縋るような思いだったに違いない。彼女は秘かに老人の荷車に潜り込む。そして、ゆっくりと進むそれに揺られ、変化が起きる。

その動きに慰められ、安心感を覚えた。何世代も、彼女の民族は荷車のなかに安心を見出し、何世代も、民族の女たちは、荷車のみを唯一の家とし、その後ろの地面に膝を突き、子どもを産んできた。優しい娘だったが、アンドリーナも、そうした忍耐力、意識しない勇気を持っていた。（*The Beadle*, p.180）

腹の子のことを知っても、老人はアンドリーナを邪険に扱わなかった。それどころか、娘の探そうとしているのが、評判のよくない男だということを心配する。彼女がこれ以上不幸に陥らないよう配慮し、一時、自分の妹の家に身を寄せてはどうかと提案する。

アンドリーナにすれば、どうもこうもなかった。ここでもまた、天に坐す父は配慮をお示し下さった。キリストの優しさが、この目の前の老人という形を取って、現実のものとなされたのだ。

「どこなりと、ご自由にお連れ下さい」。彼女は応えた。「こうして出会うことができたのは、すべて神様のおかげなのですから」（p.182）

そんなふうには、アンドリーナはキリストを発見する。ハンスおじさんの示す優しさという形でキリストが顕現したのである。

やがて、自らの罪を告白した堂守が、はるばる娘を探しにくる。不思議な気持ちで、彼女は彼を受け入れる。そして、

人生というものは、いっぽうからみれば奇妙奇天烈だが、見方を変えれば、単純至極なものである。もちろん、ハンスおじさんにとって、人生とは奇妙でもなんでもなかった。ハンスおじさんは、キリストも同然である。もしもキリストが長生きをして年老いたとしたら、ハンスおじさんのようになっていただろう——目の優しさといい、顔に浮かぶ微笑みといい。そうだ、ハンスおじさんは、キリストそっくりだ…。（pp.192-3）

そして、物語のまさに結末。

ハンス・ラドマイヤーおじさんの、優しく情に溢れる声が、最後に彼女の思考に割って入った。「さあ、いいね、なかに入れるよ。ご案内するよ。ほら、涙を拭いて、呼び入れるからね」

彼女は涙を拭い、枕のうえに身体を起こした。と同時に、堂守が扉を開いた。「いらっしゃい、おとうさん」。彼女は云った。「いらっしゃい。丸い禿頭の、ご自分の小さな孫をみてちょうだい」（p.193）

6

けっきょくのところで、どんなふうにしろ、『ビードル』を恋愛物語やそれから派生する成長の物語として読むのは間違いなのだろう。上記のように、アンドリーナの信仰の有りに関心を寄せて読んでこそ、はじめて内実らしきものがみえてくるとしたら、たしかにそうである。だが、そのためには、並はずれた我慢が必要とされる。なにしろ、その内実とは、控え目な主人公同様内へと引きこもり、あるいは、主人公の母親をめぐる過去の事件同様秘密に隠されていることが多いからである。そのなか、前面において展開してゆくのは、イギリス人の恋愛遊戯であり虚仮威しである。読者の視線は、当然のように、そちらに奪われ、同時に、主人公らしからぬ主人公の側面が露わになってゆく。そうした構図をものともせず、内実のみを追いながら物語を読めるとしたら、それこそ大したものである。ゆえに、通常の読書に従えば、煮え切らない作品と読まれたとしても仕方がない。そうした読書の誘惑に容易に逆らえないとしたら、あるいは、意図的な読み直しがぜひとも必要なのだとしたら、たしかにそうである。

『ビードル』とは、ひとつには、春のサクラメントから冬の感謝祭へと到る宗教的時間のゆっくりとした流れを綴った物語である。聖書を除けば、これといってなにもない荒野の話である。だが、それだからこそ、内面における神との対話は日常的に行なわれるし、宗教的な節目が特別重要視される。春のサクラメントが、大人の仲間入りを果たすアンドリーナだけのものではなかったのと同様に、冬の感謝祭も、一世一代の告白をする堂守のためだけのものではなかった。さまざまな名もない人たちが、ハーモニーの教会に集い、野営のテントを張り、あるいは、ユダヤ人の女の店に向いて必要な買い物を済ます。そうしたふるまいは、なにより信心の表れであり、自分が自分であるというアイデンティティを確認するための欠かせない機会となっている。それゆえ、教会に務めるという重要な役目を負いながら、気も漫ろに、あるいは、陰鬱な想いを抱いてそれに加わる堂守は、誰よりも惨めであり不幸である。『リトル・カルー』所収の「粉屋」の主人公同様のやり方で、人物としての堂守が浮上するのは、そうしたネガティヴィティ＝悲劇性を通してである。この意味で、『ビードル』は、間違いなく一篇の悲劇と云えるだろう。

節目と節目を繋ぐのは、神との日常的な対話である。それなくしては、儀式はただの祭りに墮する。イギリス人がまさにこの墮落した位置にいる。彼を指して軽蔑すべき存在と云えるのは、その所為である。彼にとっての牧師とは、たかだか「ジョニー」や「ニニー」でしかない。もっとも尊敬されて然るべき牧師をそのように呼ぶのを聞いて、とりわけ信心深いわけでもないリンドおばさんまでもが、啞然とするのも無理はない。リトル・カルーに根を下ろし暮らすアフリカーナと、他所者＝訪問者でしかないイギリス人との彼我の距離がもっとも如実に示される瞬間とも云えるだろう。イギリス人の一挙手一投足が虚仮威しにしかならない理由もここにある。ところが、アンドリーナは、これらを歪めて受け止め、いわば誤解の限りを尽くす。結果として、読者は、堪らない苛立ちを覚え、あるいは、道徳的に不謹慎と無辜の罪を彼女に負わすことになる。

神との対話は、なにより一対一の関係において行なわれる。荒野に暮らすアフリカーナにすれば、なによりそれが重要だった。あるいは、何世代も互いに離ればなれになりながら暮らしてきた結果として、それ以外の方法では神との関係を捉えられなくなってしまっていた。白いアフリカーナとして黒人の地に土着するというのは、そういうことを意味した。結果として、

『ビードル』は、先にも述べたとおり、ある種心理小説の様相を呈することになる。『ビードル』が出版された1926年という年を考えるなら、奇しくもモダニズムの時代に属し、その意味からいえば、この作品は、ヨーロッパから遠く離れた僻遠の地を舞台として達成された慎ましかな快挙と云えないこともない。しかも、その内実が、底の浅い恋愛小説などには及びも付かない、神との対話という長い歴史と伝統に接続するものとなれば、なおさらである。堂守もアンドリーナのふたりの伯母も、その深みへとどっぷり首まで浸かっている。それは、ひとつには、貧しさの悲劇でもある。じっさい、作中においては、農場主夫妻をはじめとして、貧しさから解放されている人物ほど、神との対話の度合いは薄くなる。といて、軽薄なイギリス人のようになりたいたいわけではない。牧師を「ジョニー」呼ばわりするようでは、それこそアフリカーナでなくなる。民族の歴史や伝統から無縁となった人間とは、真に不幸な存在である。だとしたら、貧しさがなにほどのものと云えようか。いや、むしろプア・ホワイトこそ、アフリカーナの正しい姿である。子どもは、荷車の「後ろの地面に膝を突き」産むのである。それが負け惜しみでないのは、ハンス・ラドマイヤーをみれば解る。アンドリーナが彼をキリストと並べ称するのは、無知の所為でもなんでもない。彼こそは、荒野における信仰の、絶えざる神との対話の結晶にほかならないからである。

とするなら、アフリカーナにとっての時間とは、なにより古錆びていてこそ価値がある。『ビードル』において過去が優遇される所以である。ゆえに、十数年まえの出来事も、現在という時間のなかで時々刻々息づき、堂守を、ふたりの伯母を苦しめる。容易にそれから解放されることはなく、ずるずると引き摺り続けてゆくのである。イギリス人などには理解できない生き方だが、これを是とするような描写が作中には幾つもある。たとえば、次のような描写がそれである。

最後の皿が片づけられると、巨大な聖書が主人のまえに置かれる。戸棚の引き出しから、アンドリーナが讚美歌の本を取り出す——食卓に就いたひとりひとりにそれが手渡され、イギリス人にも一冊配られた。台所から黒人の召使いたちも出てきて、戸口に群がる。みんな部屋には入らず、床へとしゃがみ込む。聖書が朗読され、讚美歌が合唱される。ヤンチは、椅子から滑り下りると、祖父の膝もとへと移動し、夕べの祈りを唱えた。年季奉公の召使いの子供たちも、戸口からまえに進み出て、主人の膝のところまでくると、祈りを繰り返した。「おお、主よ、奥様に従順でいられますように」と、スパッシーが荒れて嘎れた声で祈った。「ご主人様がお呼びのとき、急いで駆けつけることができますように」と、クラスが祈りを捧げた。(p.137)

日々の食事を欠かさないのと同じように、何世代にも渡って営々と続けられてきた儀式である。同席する他所者のイギリス人にすれば、鼻白む以外なかったろうが、形式こそ精神の裏付けを成すというのは、いっぽうにおいて真理である。あるいは、それが古ければ古いほど、威厳は増す。古びていればいるほど、価値を持つ。時間も経験も同様というわけだが、そうした有り様は、『リトル・カルー』の諸短篇においても一貫して認められた特徴である。まえにむかって生きるため、敢えて後ろむきに視線を走らせるという逆説である。もちろん、アンドリーナもこれの虜になっていた。イギリス人が彼女をみて、繰り返し「謎めている」と思うのも無理はない。物質的か否かという意味からすれば、彼女は、及びも付かない、あまりにも高尚

な存在だったからである。

7

たとえば上記のように、『ビードル』という作品は、あたかも『リトル・カール』の諸短篇をまえにしたかのように、意図的な読み直しを強く要求する。そうした読みに従えば、イギリス人の存在など、耳障りな雑音も同然となるのだが、とはいうものの、あくまでもこれは、意図的な読みを行なったうえで、はじめてみえてくる作品の姿である。放置すれば、『ビードル』は、イギリス人に対する女主人公同様、どこまでもひ弱な作品であり続ける。そうなるのは、いうまでもなく、ただの雑音でしかない存在をあまりにも前面に押し出しすぎた結果である。しかしながら、そうでもしないと、作者にとっては至上命題とも云える長篇執筆が成り立たなくなる。水増しとまでは云わないにしても、物語を長引かせるための口実を必要とした。結果として、物語に歪みを生じ、あるいは、意図的に長さを調節して物語を読むといった奇妙な負荷を読者に強いることにもなったわけだが、いずれにしろ、この意味からすれば、『ビードル』とは、ずっと短くても済んだ作品には違いない。けれども、だからといって作者を責めたりしたら、それこそ酷というものだろう。多少とも作者の伝記を知っているなら、そうである。とするなら、読者にできることは、雑音に惑わされることなく、あたかも『リトル・カール』の諸短篇を手にしたときと同じやり方で、さらに『ビードル』を読み進めてみることである。

『リトル・カール』の諸短篇同様、『ビードル』にも、モデルが認められている。前回も世話になったハロルド・シュープ編纂の日記『シークレット・ファイヤー』の189ページに、その記載がある。文字どおり「ビードル」とタイトルの付されたごく短い項目だが、ふたりの老女と長年にわたり奇妙な同居を続ける堂守の住まいを訪ねた話がそこに出てくる。作中の家同様、泥壁の住まいである。部屋が三つあり、べつに料理のための小屋があるのも、粗末だが隅々まで小綺麗にされている点も、物語と同様である。姉妹のひとり、とりわけ恥ずかしがり屋の性格で、その点物語の登場人物ヤコバによく似ている。堂守は不在だったが、それについても話を聞いた。話によれば、何年もまえのこと、彼は姉妹のひとりと婚約したのだが、反対が生じたので、結婚はあきらめ、代わりにふたりと同居するようになったという。そして、以来ずっと、姉妹のいずれに対しても、つねに乱暴な態度を取り続けているというのだが、理由は欠けているものの、これらの点においても、物語の設定とびたりと重なる。

『ビードル』の物語は、そのように始動した。ついでになされたような取材だったが、強烈な印象に作者は取り憑かれた。1913年のことである。以来十数年、不思議な堂守の話は、熟成され、一篇の物語の核を構成するに到った。欠けている理由が補填され、物語に必要な肉付けがなされていった。なにゆえ堂守は結婚をあきらめたのか。反対とはどのような障碍だったのか。等々。かくて、実在しない末の妹が想定される。これがふたりの姉と堂守を巻き込む事件を引き起こす。もちろん、事件は恋愛沙汰でなければならなかった。母親は死んでしまったが、厳格な父親はなおも健在である。家系は、物語中リンダおばさんが半分捏造しながら説くような、由緒正しいものである。

…ステーンキャンプ家は、いまはごく貧しい家族だが、先祖は18世紀のはじめに植民地へと移住してきた教師だった。その最初のステーンキャンプが教えるだけでなく、説教もし

たというのは、大いにあり得ることである。きっとそうだったに違いない。したがって、彼は牧師だったと云ったところで、おそらく間違いではないだろう。だとしたら、牧師の子孫に対して、どんな難癖が付けられようか。いかに貧しいとはいえ、それでもなお彼女らは牧師の子孫であり、ということとはつまり、良家の出だということなのだから。(p.70)

あるいは、

…彼女の先祖である牧師のステーンキャンプは、その名前が植民地の歴史を綴った書物に出てくる人物である。じっさい、その名前は、オランダ東印度会社時代の植民者の名簿にも載っている。(p.105)

現時点での貧しさと、それと裏腹に誇り得る家系の立派さ。これこそ、アフリカーナにとって、アイデンティティの核心部分を構成すべきもののひとつである。そこから起動してはじめて、物語は特別の意味も価値も持つだろう。

最初期の『ビードル』は、以上のように想定されていたに違いない。ここから長篇小説への道がはじまった。恋愛沙汰の延長線上にアンドリーナが産まれ、成長し、いまや大人の仲間入りをしようとしている。そこに他所者のイギリス人が登場し、彼女は母親と同じ道を歩み出す。文字どおりの因縁譚である。過去の物語と現在の物語が重なる。もちろん、主役は作品が想定された順序にしたがって、前者が務めるべきものである。後者は、けっして直接具体的には語られることのない前者の物語を、暗示し投影する役目を背負う。読まれるべきは、あくまでも主役たる過去の物語なのだが、むろん、そううまく事が運ぶわけもなく、現在の物語が、主役の地位を脅かしはじめる。物語に葛藤が生じ、とりわけアンドリーナの性格からは、積極性が徹底して剥奪される。ある意味どっち付かずのまま物語は進行し、恋が破綻し、アンドリーナは妊娠する。ここまでくるのに、じつに物語の四分の三以上がすでに経過している。あとには長篇小説を成り立たせるのに十分な量の原稿が残された。ここに来て漸く現在の物語は過去の物語に追いつく。いわばこの時点から、『ビードル』の物語は、長い準備を終えて真にはじめられることになる。道ならぬ恋と、その証にほかならぬ不義の子。男に棄てられてのち判明する妊娠と、出産。アンドリーナはそれをどのように切り抜け、あるいは、そもそもアンドリーナの母親は、どのようにそれを切り抜けようとして失敗し命を喪くしたのか。ふたつの物語を結びつけることのできるただひとりの人物である堂守が、長すぎる待機を経て動き出す。ここで長すぎる待機と苦情を呈することができるのは、『ビードル』とは、もともとは、奇妙な同居を続けるひとりの堂守の物語だったはずだからである。その堂守が、自分こそはアンドリーナの父親であると告白する。その場面からあとが真の『ビードル』の物語を構成する。すなわち、4部構成の最終部の、第6章の終わり以降ということになる。本稿の使用しているテキストでいえば、残されたページは、わずか20ページ程度にすぎないが、意義深くも、その頁数は、一篇の短篇小説を構成するのにちょうどよい長さでもある。

以上のように、『ビードル』とは、じつに奇妙な長篇小説である。長すぎる短篇小説と云え

ないこともないのだろうが、ほんとうにそれだけだったのなら、出版当初の好評を受けることもなかっただろうし、いま現在もそのテキストがペーパーバックで手に入るといった状況もなかったに違いない。ようするに、『ビードル』には、それ以上に論じられて当然のなにかがあるということなのだが、したがって、本稿も、残りの頁を使って、いよいよ物語の核心部分へと踏み込むことになる。

解っているのは、堂守の告白、あるいは、その前後から、物語は真に始動しはじめるということである。グレート・カルの農場に去ったアンドリーナから手紙が届く。珍しくも、ヨハンナではなく、ヤコバに宛てた手紙である。堂守はそれを携え、彼女を捜しにゆく。彼女は果樹園でみつきり、堂守は彼女に手紙を手渡す。かつての求婚相手にほかならない彼女である。奇妙な同居をはじめて十数年、モデルとなった堂守同様、むしろ冷たく、ぶっきらぼうに扱ってきた。姉のヨハンナとは、もとから犬猿の仲だったが、妹のヤコバとは、心通わずなにかがあっても奇異しくない。ところが、じっさいそうっていないのはなぜなのか。いまひとつはつきりしないのは、ふたりの姉妹がどこまで堂守の秘密を知っているのかということである。すなわち、ふたりが堂守の共犯者か否かという点である。この点の曖昧さが、堂守とヤコバのあいだを妙な具合に疎遠にしている。モデルとの関係を考慮に入れば、この謎がもともとのエピソードの最深部を占めているはずである。あるいは、それゆえにこそ、あえて謎は謎のまま残されたということなのだろうか。いずれにしろ、その結果、物語の進行を遅らせるのには思惑どおり役に立っているのだから。

問題の手紙は、アンドリーナがまさにどん底から救いを求めて書いた手紙である。苦しい胸の裡を理解してくれるのはヤコバしかいないと、涙で文字を滲ませながら書いた手紙である。だが、貴重このうえないこの手紙を、ヤコバは自由に読むことができない。以前から具合のよくなかった心臓が、最近頃に悪化し、苦痛で文字を追うことができなかったからである。苦痛に堪えながら、拾い読みをするように彼女は手紙に目を通してゆく。だが、手紙を書くアンドリーナのほうも、読み手に劣らず、平常心からは遠く離れた精神状態になっている。ただでさえ解りにくい文面が、心臓の痛みと相俟って、いよいよ解読できなくなってゆく。幻想に急かされたヤコバは、大急ぎでヨハンナを探し出さなければと思う。ヨハンナと堂守との仲違いをなんとかして解消しなければと思う。心臓のためには避けなければならないと知りながら、一刻も早くと彼女は走った。果樹園を出て、ヨハンナの腕のなかに倒れ込む。そして、讒言のように切れ切れの言葉を口にしながら事切れる。

この手紙と同じ便で、農場主の妻にも息子から手紙が届き、アンドリーナが不義の子を身籠もっていること、父親を捜すと云って自分たちのもとを秘かに去った旨知らせしてくる。悲劇のうえの悲劇。恥の上塗りとも云える。折悪しく感謝祭と時期が重なっていた。事は集まってくる人びとの好奇心を掻き立てる。ヨハンナと堂守の和解というヤコバの望みは叶わないが、代わりに、牧師の説教に促されるように堂守が告白する。「責めるなら、アンドリーナでなくわたしを責めるがいい」。「わたしが犯した罪に比べれば、アンドリーナの犯した罪はものの数ではない」と。自分はヤコバと結婚することになっていた。にもかかわらず、その妹から、与えられるはずのないものを奪い取った。アンドリーナの父親は自分である。母親が男に棄てられたのはその所為であり、出産に際して母親が死んだのも、わたしが犯した罪の所為なのだと。

もはやハーモニーの農場に用はない。荷物をまとめ住み馴れた家を堂守はあとにする。これまでは表立ってできなかった親らしい援助を、思う存分我が子に注ぐために。そして、ここで

も、不思議とキリストが顔を出す。

…なおも身体は壮健だから、どこに住むことになるろうとも、娘と孫のために働くことができるだろう。罪を告白しなかった所為で、神はどんな犠牲もお受け取りになるろうとしなかったが、御子である世の贖い主に免じて、いまはわたしを憐れみ下さり、こうして働く力を付与して下さい。（p.184）

ふたりの姉妹に負けず劣らず、堂守の信仰もまた、旧約的に凝り固まっていたはずである。それが、最後の最後に到って、キリストに支えを求める。同じころ、遠く離れた荒野では、我が子が同様にキリストをみつけだしていた。これはただの奇遇ではないだろう。これにより、現在と過去のふたつの物語が、現在と過去のふたつの罪が、救いと新生の大いなる見込みとともに、切っても切れない関係を結ぶことになるからである。一体化と云ってもけって過言ではない関係である。長い手続きを経て、『ビードル』が、作者のポーリン・スミスが、達成したいと望んだのは、じつにこの一体化にほかならなかったのである。

9

『リトル・カール』の諸短篇同様、『ビードル』にもモデルが認められる。ほかにも必要な条件は十分に揃っており、したがって、普通なら、これを起点にして一篇の短篇小説に仕上げればよかったのだが、懸案の長篇小説執筆という内なる要請に従い、作者は勇気を出して冒険に乗り出すことになる。といて、作者には、それを果たすための特別な小説作法の準備があるわけではなかった。身に付いているのは、一連の短篇小説の執筆を経て習得した手法のみである。これは、取材を通じて、忘却の淵に沈潜する声を丹念に拾い上げ、それに形を与えるといったやり方で成立した作者独自の手法だった。なによりそれは、oral literature との接触なくして成り立ち得ないものだったが、もちろん、目前の冒険においてもそれは生かさなければならなかった。とはいうものの、そっくりそのまま採用したのでは、長篇小説執筆に通用しないのは目にみえている。そこで、作者が採った苦肉の策が、遅延という方法だった。これにより、短篇小説の実現を遅らせるのである。遅らせたぶんだけ、作品は長くなるというわけだが、むしろ、実行するのは、口で云うほど簡単なことではない。その機微を最後にまとめておくことにしよう。

ひとつには、物語は、まさに一行めからはじまっていなければならないということである。その緊張感が、短篇小説として、どこまでも維持・継続されなければならない。そのため、作者は、主人公の出生の謎というひとつの興味を措定する。しかも、関係者の口を巧妙に塞いで、容易に秘密が露見しないようにした。そのやり方が巧妙だったのは、当事者それぞれの性格や生き様、信仰の有りにまで事情が絡むよう、設計されている点である。緊張感は、自ずと維持されなければ意味がない。この点、思惑は有効に機能した。とはいうものの、口を塞いでいるだけでは、物語は沈滞するばかりである。そこで、いわば狂言廻しとして登場するのが、イギリス人である。苦肉の策といえば、むしろこちらのほうかもしれないが、幸い、成功している先行作品が手近に存在した。たとえば、前回の議論においても言及した、オーリーヴ・シュライナーの『アフリカ農場物語』がそうである。それにおいても、ボナバルト・ブレンキンズと

いう、軽薄このうえないイギリス人が出てくるのだが、その鞞みに倣おうとした。狂言廻しである以上は、物語にどんな深い傷痕を残すこともなく、いずれ舞台から退場してゆく。『ビードル』においては、遅延に資する役割をそうした他所者＝イギリス人に負わすことができた。すなわち、アンドリーナに子どもを身籠もらせるという役割である。oral literatureらしく、いわゆる因縁譚が作品の根底に想定されている以上、いずれ誰かが果たさなければならない役割には違いなかったが、それが単なる役割でしかない証拠には、イギリス人本人は、そうとは一切知らぬまま本国へと去ってゆく。『アフリカ農場物語』のボナバルト・ブレンキンズがまさにそうだったように、所詮狂言廻しは狂言廻しにすぎないから、それに頼るのにも限界があって当然である。この点、結果からみれば、『ビードル』の作者も見切りを誤ったというほかないが、同時に事態が取り返しもうなく悪化することがないように手を打っている。

ひとつには、対比という手段である。イギリスと南ア、あるいは、リトル・カルー。イギリス人とアフリカーナ。そうした対比には、むろん、支配と被支配というより現実的な敵対関係が荷担する。いうまでもなく、悪役は狂言廻しのほうだが、ポーリン・スミスという作家がこの種の対比を得意とすることは、『リトル・カルー』の諸短篇においてすでに実証済みであった。『ビードル』においても、たとえば先に紹介した食後の祈りの場面の引用が示すとおり、意図的に過去や伝統に重きを置いて、あたかも近代以前を礼讃するかのような描写が幾つも散見される。そうした描写を成り立たせる後ろ向きの視線の有効性については、前回の議論において詳しく述べたとおりだが、それがここでもうまく機能して、狂言廻しの軽薄さを中和するのに成功している。しかも、この手法は、それ自体でひとつのイデオロギーを構成していると云えないこともないから、その意味でも、中和の効果はよりいっそう促進されることになった。ただし、描写はあくまでも描写であり、どんなに優秀であっても、断片的にしか物語に貢献できない。そこで、そうした弱みを補完すべく、さらなる手段が採られることになる。

先にも述べたとおり、『ビードル』の物語の時間は、春のサクラメントと冬の感謝祭によって、最初と最後が切り取られている。いずれも、アフリカーナにとっては、アイデンティティの根幹に関わるような儀式である。しかも、それらは、時間の面から物語を制御するものであるから、断片的にならざるを得ないといった描写の弱みとは、本質的に無関係である。自ずと備わった、そのような好条件のもと、物語の時間の最終的な支配権は、つねに自陣に確保することができた。くわえて、上記の描写という手段と手を携えるようにして、たとえば、次のような、あたかも『リトル・カルー』の諸短篇を思わせるような、場面の提示にも成功している。少々長くなるが、ここは原文のまま引用しておこう。

In the church-land, and round about it in the open veld, they outspanned, pitched their tents or spread their wagon-sails, and built their fires for coffee-making. All had brought with them provisions for their stay: coffee, biltong, dried rusks in little kidskin bags, husked and pounded mealies for pap, meal for griddle-cakes and salted goat-ribs to brander on the coals of their wood-fires. Below each cart and wagon hung a three-legged pot, a big black kettle, a wooden cask for water, a folding stool strung with thongs of leather. Many brought with them also, on swinging bed-frames strung with leather, their feather beds and pillows, and their gay patchwork quilts.

In the Aangenaam valley, cut off from both Platkops dorp and Princhestown village, men and

women still retained many of the old customs which had already died out elsewhere. Here the older men still might be seen wearing kidskin trousers and soft, wide-brimmed felt hats, while the women, like Johanna and Jacoba Steenkamp, wore black calico gowns over many petticoats, and black calico sun-bonnets called kapjes. Veld-schoen were worn by all alike, and but for their veld-schoen the feet of many were bare. Among the younger people coloured prints were slowly coming into fashion for the women and girls, and cord trousers and cloth waist-coats for the men. With their coloured prints the women wore stiffly starched plain white sun-bonnets, like miniature wagon-tents. The making and cording of these sun-bonnets, the starching and ironing, was a work of art needing long practice. Only the wives of the wealthier farmers, and only the most daring of these, wore hats. (p.54)

sacramentを受けるため、ほうぼうから集まってきた人たちの描写である。 sacrament という時間と、伝統あるいは古き良き時代というイデオロギーの結合。一石二鳥とは、まさにこれである。

そのようにして巧みに作者は短篇小説の進行を遅らせてゆく。そして、先に述べたように、イギリス人=狂言廻しの退場とともに、いよいよ遠慮なく短篇小説の完成へとむかうことになるわけだが、その詳細についてはすでに論じたとおりである。かくて、とりあえずの緊張感は、一行めから維持されたまま、物語は結末へとむかってゆく。それからすれば、試みは成功したとみなしてよいのだろうか、そうした緊張感の正体とは、いうまでもなく、短篇小説のそれであり、いかに上記のような重ね合わせ=一体化が奇蹟的になされたとはいえ、ここでも自ずと限界があって当然である。そのなよりの証拠が、ほかでもない、作品のタイトルに現われている。タイトルが、「アンドリーナ」でなく「ビードル」でなければならなかったのは、作品化するべきもとのエピソードの所在が、前者でなく後者にあったからにはほかならない。『ビードル』という作品の正体が、見た目の長篇小説ではなく、『リトル・カルー』の諸短篇同様、短篇小説であることの動かぬ証拠とも云えるだろう。同様に、そこまで取材=oral literature 的要素のインパクトというものが、この作品においても強かったと云えるのだろうし、作者が自身の強みに対してどこまでも忠実だったと考えることもできるだろう。oral literature との関係からすれば、『ビードル』の場合、『リトル・カルー』とは違い、一筋縄ではゆかないが、むしろそこにこそ作者の並々ならぬ献身と骨折りの跡をみるべきだろうし、ハロルド・シューブ編纂の日記における短い記述と、一冊の書物として完成された『ビードル』という作品との、気の遠くなるような距離を慮るべきである。そして、そうした距離を越えながらも、なおかつoral literature 的出自を物語に生かし続けた快挙に心から快哉を送るべきだろう。

参考文献

Smith, Pauline. 1989. *The Beadle*. David Philip, Cape Town & Johannesburg.

----- Harold Scheub, ed. 1997. *Secret Fire*. Univ. of Natal Press, Pietermaritzburg.